ジョルジュ・サンドの田園小説について

村　島　実恵子

1804年パリ生れのジョルジュ・サンドは浪漫主義の強い影響を受けた情熱的な作家であった。貴族出の父と庶民出の母を持ったサンドは出生によって２つの環境を持ち，教育では18世紀の合理主義，19世紀の浪漫主義の縫合点にあった女性の生涯と云える。少女時代に父を失くしたサンドは母を愛するあまり，父の代りになろうと思って男の子のような行状を身につけていった。この態度は家庭教師による男の子としての教育，服装でますます固められて行った。

17才でデュドヴァン男爵夫人となり，ノアンにある領地の監督や一家の主婦の役目を果し乍ら，自由な青春の楽園を創り上げようとした。「我が生涯」によると，孤独と冥想のうちに日々を送り，音楽や詩作をしたり，画を描いたり，乗馬に興じたり，哲学書や文学書を耽読したり，田舎の農民達との団欒の間に物語られる無邪気な会話に興味を覚えている。このように彼女が生れ乍らに具えていた物語の趣味はこの間に著るしい教育を受けていった。

ジュール・サンドーと合作した「ローズ・エ・ブランシュ」が世に認められるようになって彼女は画家としてでなく作家として世に出る決心をした。その后サロンの文学者達との交わりの中で社会主義的な思想を持ち，サンドはその主張を述べた作品を書いている，これは彼女の第２期の作品「コンシュエロ」に良く表われている。

彼女の一切の情熱が鎮まった後は，少女時代の家の中に，ノアンの片田舎で，青春時代に求めて得られなかった平安と幸福の楽園を作り上げる事

に成功している。情熱に求めて得られなかった幸福を老後の生活の中に見出していった。

サンドの生涯は，親切で悪意のない人を恨む事をしない母性的な愛情を以て人に接した世話好きの女性としてであった。誠実を願い，自然の愛を求めた。サンドは自分自身の独創を強く表明するよりはむしろ，生活していた周囲の思想を忠実に反映して行った。

サンドの作品は通常4期に分けられているが，初期の作品「アンディアナ」や「レリア」等では，彼女はルソーやシャトーブリアンの強い影響を受けており，そのヒロインはいつも癒す事の出来ない不安と苦悶と憧憬を抱いている。

サンドに先ず影響を与えたのはシャトーブリアン，次に哲学書ロック・モンテスキュー，ベイコン，ライブニッツ等，モラリストの書ではモンテーニュ，パスカル，ラ・ブルュイエール，外国の古典書ウルギリウス，ダンテ，ミルトン，シエークスピア等，中でも彼女の心を捉えたのはルソーであった。

サンドは人々に理解させたいと思っている考えを充分に素晴しく，特異な文体で描き出している。彼女はその時代の代弁者の一人でもあった。又，女性が沈黙している時代の女性の声でもあった。

サンドの作品は通常4期に分けられている。

第1期（1831—1840）

1. アンディアナ
1. ヴァランティーヌ
1. レリア
1. モープラ

第2期（1840—1845）

1. コンシュエロ
1. フランス旅行の同伴

1. アンヂボの水車小屋

第3期（1845—1852）

1. 魔の沼
1. 棄児フランソワ
1. 笛師の群れ
1. 愛の妖精

当時の影響を超脱し，独自の境地を開拓した一連の作品で批評家の高く評価するものであり，サンドが少女時代に深く呼吸した自然，田園を懐かしく追想・反芻して描いている。

第4期（1852～1865）

1. 我が生涯
1. ボワドレの殿方
1. メルカン嬢
1. 祖母のお嘶

アナトール・フランスは「文学生活」の中で，「自然主義芸術は理想主義芸術より以上に，真実なものではないし，ゾラは必ずしもサンド以上に人間や自然を観察していない」と云っている。

サンドはその時その時の霊感のままにペンを走らせ，事件を展開させるのが常であったと云われている。この為小説の構造に或る程度の緩みが生じて来たり，性格が鮮明に描かれないと云う欠陥が生じている。

田園小説の女主人公は常に理知的で，しかも愛情深い貧しい女であるのに対し，主人公の男性は比較的好人物の温和しい中農の息子である。サンドは女主人公に最も力を注ぎ，理想像を描いたのに違いない。

サンドは純情詩の物語，情緒的社会主義的物語，田園物語，史的伝奇譚等，数多くの作品を書いている。一方彼女は浪漫派の終局を告げる役目と共に，次代へ伸びる新文芸を生み出す役目を演じている。サンドは小説の中に詩的なものを流し入れた丈でなく，詩人の霊感，満たされざる女の情

念，結婚のあり方等社会への浸透力を樹立している。

ユーゴーがブルジョワ生活を，ヴィニィが厳しい諦めの生活を，ミユッセが快楽の生活を送ったのに反し，サンドは彼女の天賦の才のみに従う生活を主張していった。

シャトーブリアン及びバイロンを頂点とした感情的なものの発展と見做される抒情的浪漫主義は，殊にサンドの小説の中に描かれている。浪漫的熱情にかられたルソーの弟子サンドは「アンディアナ」，「レリア」，「ジャック」の中で抒情的テーマを発展させて行っている。次いで彼女の社会主義的思想は「フランス旅行の同伴」，「アンヂボの水車小屋」の中で人道的社会主義を創造し，彼女自身の夢を実現させて行った，そこには平等と博愛及び階級の融和が見られるのである。

田園小説の中でサンドが描いた農民はベリーに於けるルソーのイメージを浮び上らせている。これは彼女の田園生活の長い経験から，権威を持って田園の労働を描かせたのに違いない。サンドはその為，親しい人にはベリー地方の方言で手紙を書いている事からも分る。サンドが社会主義思想にとりつかれていた時，貧しい人の高貴さを，金持のエゴイスムを示す作品を書こうと思いたっている。サンドは自分の作品によって時代を改革してみようと試みたのではないだろうか。

その最初の試みである「魔の沼」は第2期の作品に属しているのではなく，サンドがノアンの田舎生活の中で夜，炉端で聞いた農民達の話を文学の中に入れてみようと云う試みなのであろう。

サンドはその新しい小説作法によって，文体の中に，平凡さの中に新鮮な息吹きを送ろうとしたのに違いない。

「魔の沼」は巧みな素朴さで語られている。これは単に愛の物語ではなく，我々に善意は人間に与えられた天性のものである事を示している。

農夫ジェルマンと少女マリーは単純で清く，素直な考え方の人達である。ルネ・ドラミックは「ポールとヴィルジニィが1789年の革命を告げた

ように，魔の沼は1848年の革命を告げている」と云っている。

人間は生れつき善なものであるとするならば「くさり」を解こうと努力するに違いない。即ちそれは社会的，宗教的，道徳的，政治的な束縛の事である。「ジャンヌ」，「魔の沼」，「棄子フランソワ」，「愛の妖精」等に彼女の理想像を描いてみようとしたのに違いない。これらの作品を通してみると，何故となく人間を愛させるように運命づけられている。「魔の沼」の登場人物を分析してみると，金持のゲラン未亡人と無知な農夫以外は，機智に富み，勇気と品位を備えている。

サンドは田園の人々の生きる夢は，甘く自由で詩的で牧歌的で単純なものであると思っている。それはウエルギリウスの「田園の人々が自分の幸福を知る事が出来たらどんなに幸福であろうか」と云う言葉でも表されている。サンドがベリー地方の暖かい晴れた日を逍遙している時に目撃した1人の若い農夫が牛と鋤を使っている光景が作品の登場人物となっていったのである。これはバルザックが描く悲惨な農民達とは対照的である。

ジュール・メートルは「ジョルジュ・サンドは物語の作者に生れついている。登場人物の少女に至る迄気を配り，小さな羊飼達を喜ばせる為に美しい物語を作っている事でも分る。ベリー地方の風景は絵画的な美しさではない，その美を理解する為にはそこに長く生活しなければならない。しかし次第に美が固定してくる，その様な地方である。

ベリのジョルジュ・サンドは，ブルターニュのシャトーブリアンと同じであると云えよう。子供の頃から田舎に育ったサンドは，田園の登場人物を良く描き出している，それは魔法と夜の囁やきの森に入っていった人の心理状態が非常に美しく上手に表現されている。

サンドが「魔の沼」を書き始めた動機は，ホルバインの〝死神の百態〟の版画を見た為である。彼女の哲学は死についての事よりも現実に生きる生活の方が大事であった。これは彼女のレアリスムの考えの表われであり，現実の生活をより良く豊かなものにしなければならないと考えているから

であろう。その彼女の作品には愛と信条と本質的な徳性を感じる事が出来る。サンドは書く為に生き，生きる為に書いたのである。サンドは彼女の死迄に百巻以上の小説，劇，随想録，書簡文等を残している。

「魔の沼」，「愛の妖精」はフランスに於ける田園生活の傑作と云われている。サンドは3期の文学生活を経て第4期と云われる時代に到達するのである。

彼女の田園小説の4作は1作毎にその手法に進展の跡が見られる。〝魔の沼〟は最も素朴な所謂「心理のない小説」に属すると云われているが「棄児フランソワ」に於いては主人公フランソワの心理解剖に一歩を進め，更に「愛の妖精」に於ては3人の主要人物を対立させてその心理分析は一層学実的になっている。

以上の3作は何れも舞台がベリーサーアン附近に限られていたのに対し，大作「笛師の群れ」はベリ，ブルボンネニ州の自然と住民を背景とし，多分に伝奇的色彩を交えて，大衆小説とも云うべきものを形作り，サンドの晩年の諸作への移行が分る。

4作何れも傑作と云われているが「愛の妖精」はその随一に数えられるものであり，殊にルソーに誰よりも深い影響をうけたサンドの思想が随所に溢れている。主人公ファデットの性格と精神的環境はサンド自身の少女時代をモデルにしたものと思われ，その背景はサンドの郷里のノアンの附近，フランス中部の忠実な描写である。

サンドの思想の根底をなすものは人道的，民主的な社会思想である。サンドの強い想像力は現実の全ゆる形を捉え，風俗社会から清純な社会にまで筆をのばしている事である。彼女の作品のモデルは生活の中にあり，テーマは自分の周囲を観察すれば良いと自ら言っている。

知性の人であったスタール夫人が才能ある女性を取り上げたのに対し，感性の人であったサンドは女性の感情を強調している。

地方にいる時は小さい町のけち臭さに苛立ち，芸術と礼節と雄弁の世界

があると信じ，パリにその才能に恵まれた人が受け入れられ，思想と感情を互いに交換する事が出来，選ばれた者の生活，礼節ある優雅で格調高い社会があると信じていたように思われる。しかし都会の人々の偽善・不信をいやと云う程味わったサンドは真実の社会を再び田園生活の中に見出していったのであろう。

田園小説の作品にはサンドは社会，文学，政治の影響を全然受けていない独自のものと云える。サンドの文体の特長は文の容易さ，豊富さ，活動力であろう。サンドは筆を取って書く事に少しの苦痛も感じていなかったようである。無意識に近い筆の運び方が感じられるのである。時には作中の主要人物を置き去りにして彼女1人が前進し，人物が彼女から離れて独立した行動をとっているように見える事がある。

パリを離れ，ノアンの館に於ける生活が彼女の文学生活の中心をなしている。サンドは当時の大作家達と親しく会談し，甘い物思いに耽り，孫の愛情に囲まれ，ベリの人達に尊敬され乍ら，ジョルジュ・サンドは1876年に73才の生涯を閉じた。